

37 デンマークの師・マッセン博士に 宛てた野口英世の書簡

石 黒 達 也

野口英世は、一九〇三年九月から一年間、デンマークの首都・コペンハーゲンにある国立血清研究所 (SerumInstitut SSI と略す) に留学した。ロックフェラー研究所が設立される直前である。野口英世は、SSI 留学中に指導を受けたトールバル・マッセン (Thorvald Madsen) 博士を終生、師と仰ぎ、事ある毎に手紙を書いていた。この書簡二十八通が、平成三年マッセン博士の三男であるステン・マッセン博士 (Sten Madsen) から、財団法人・野口英世記念会に寄贈された。

SSI は、一九〇二年九月に設立され、初代の所長はデンマークの微生物学、免疫学の祖とされるサラモンセン教授 (Carl Julius Salomonson) であったが、研究の実務はサラモンセン教授の愛弟子であるマッセン博士が担当し

ていた。野口は、この研究所の初めての外国人留学生であった。野口英世の庇護者であり、ロックフェラー研究所の所長に内定していたフレクスナー博士がマッセン博士と知己であったため、野口を SSI に留学させたのである。マッセン博士はフランクフルトのエールリッヒ、ロンドンのバロック、ストックホルムのアレーニウスなど、当時のそうそうたる微生物学者とも交流があり、野口は SSI 滞在中にこれらの大家と知り合う幸運に恵まれた。また、マッセン博士の父親・V.H.O. マッセン将軍が陸軍大臣をしていた関係で、国王・クリスチアン九世の宮殿に招かれる光栄にも浴した。

書簡は、野口がコペンハーゲンからニューヨークに帰った翌年の一九〇五年から、西アフリカのアクラで客死する前年の一九二七年におよび、いずれも英文である。書簡は、大きく分けると、

(一) コペンハーゲンで行なっていた蛇毒研究の続き
に関する書簡や近況報告など八通 (一九〇五年十二月から一九〇七年十二月の日付け)

(二) 梅毒の研究に着手し、脳・脊髄組織中にトレポ

ネーマを発見する迄の書簡四通（一九二二年五月から一九一三年四月の日付け）

(三) 脳梅毒に関する業績をヨーロッパ各国で講演した時の書簡八通（一九一三年九月二十一日から同年十月三十日の日付け）

(四) ヨーロッパから帰り、回帰熱などの研究に携わっていた時期の書簡三通（一九一三年十一月から一九一五年五月の日付け）

(五) 黄熱病研究に着手し、最後の黄熱病研究のためアクラへ向かう迄の書簡五通（一九一八年十月から一九二七年十月の日付け）

の五部に分類される。これらの書簡の一部は、様々な野口の伝記中に引用されているが、全書簡を通して読むと、野口が行なった研究の足跡を克明に辿ることが出来る。野口は、これらの書簡の中で、自分のことを「先生の最初の外国人弟子」(your first foreign pupil) とか「先生の古くからの弟子」(your old pupil) と呼ぶなどして、マッセン博士に最大級の尊敬の意を表している。

マッセン博士は一九〇九年、二代目の所長に就任し、

一九四〇年退官するまで「SS」のみならずデンマーク医学の発展に多大な貢献をした。一九一三年、野口が訪欧した時には、自宅に招いて歓待し、野口に多大な感銘を与えた。この時、野口がデンマーク王室からダンネブロー勲章を授けられたのは、マッセン博士の強い推薦があったからである。野口の死後、これらの手紙はマッセン家で大切に保管されていたが、上述のような経緯で、現在は東京の財団法人・野口英世記念会に寄贈され、近々原文および翻訳文が公開される予定である。